

第 20 回フィロロギカ研究集会

2021 年 10 月 9 日 (土) 12:00 より

オンライン開催 (Zoom 使用)

発表要旨

Nonnus, *Dionysiaca* 7. 175–179

北見紀子

Nonnus, *Dionysiaca* 7, 175–179 は前後とのつながりが悪く、文意もあいまいであることからその存在が疑問視された。主な問題点は(1) v. 175 の φόβον ἄλλον (別の恐怖) とは何をさすのか不明瞭である。(2) v. 177 εἰς ῥόον, εἰς ἀνέμους ἀπεσείσατο τάρβος (流れの中に、風の中に怖れを振り捨てた) とはどのような行動をさすのか。(3) v. 179 にはホーライ (季節の女神たち) が登場するが、唐突な感がある。またホーライには προμάντιες (予言の力を持つ) という形容詞が付されており、この場面における中心人物セメレの運命のさらなる予兆を感じさせるが、何の予兆なのかは記されておらず、v. 180 以降ともつながりが無い、ということである。

本発表では、(i)この場面の文脈 (カドモスの娘セメレが悪夢を見て、凶事の実現を避けるために捧げた犠牲獣の血を浴びる。それを洗うために水浴に行く) とのかかわり、(ii) *Dionysiaca* の構成の特色 (同工異曲の場面が多い、筋立ては完成しているが細部では矛盾が多く、作品としての仕上げを欠く)、(iii) Nonnus に影響を与えた先行文学との関係、という点を中心にこの箇所を解釈を再考したい。

『パン讃歌』の 4 行目と 7 行目について

泰田伊知朗

本発表では、『パン讃歌』の 4 行目と 7 行目の読みについて、19 世紀後半以降広く支持され続けた読みではなく、Köchly (1881) や Ludwich (1908) が採用した形をほぼ全面的に支持し、その根拠を示す。

以下が 19 世紀後半以降一般的に支持されてきたテキストである。この形を大多数の写本が残している。

4 αἶ τε κατ' αἰγίλιπος πέτρης στείβουσι κάρηνα
5 Πᾶν' ἀνακεκλόμεναι, νόμιον θεόν, ἀγλαέθειρον,
6 ἀνχμήενθ', ὅς πάντα λόφον υψόεντα λέλογχε
7 καὶ κορυφὰς ὀρέων καὶ πετρήεντα κέλευθα.

この形は他の写本との間に 4 行目と 7 行目の行末に関して、以下の相違がある。なお a , p , f , b は現存する写本ではなく、写本のグループを示す。

- ① a & p (計 16 写本): 4 κάρηνα, 7 κέλευθα. (上記の今日支持されている読み)
- ② f (2 写本): 4 κάρηνα, 7 κάρηνα.
- ③ b (Π のみ 1 写本): 4 κάρηνα, 7 κάρηνα (γρ. κέλευθα)
- ④ Köchly & Ludwich: 4 κέλευθα, 7 κάρηνα

①が 19 写本中 16 写本に残されていることもあり、これまで支持されてきた。②と③は欄外の異読の有無を除けば同一である。①を残す写本と②か③を残す写本では、写本の数では 16 対 3 と大きく異なるが、グループの数で比べれば 2(a と p) 対 2(f と b) で同点である。さらに各グループの信頼性にも明確な差はない。従って、本箇所正しい読みが何かという判断は、写本の数だけを根拠にして行うことはできない。

さて①、②、③のうちいずれかが現存する写本の祖本 (Ω) に含まれていたと仮定すれば、写本の系図から考えても③が最有力であろう。というのも③から①が生じたのは a と p が欄外の異読を本文に入れたため、③から②が生まれたのは f が欄外の異読を書かなかったため、と起こりうる可能性が高い。

そして③では γρ. κέλευθα が 7 行目の欄外に書かれているが、これがもともと 4 行目の欄外に書かれていたというのはいりうる推論である。その理由は、③の本文では 4 行末も 7 行末も κάρηνα で共通しているからである。

もし 4 行目の欄外に κέλευθα が書かれていたならば、写本伝承のどこかでは κέλευθα が 4 行目の本文に含まれていたのだろう。従って④の Köchly と Ludwich の形も写本伝承の点から考えても、無理のない形だと言える。

そして 4 行目末に κέλευθα、7 行目末に κάρηνα としたほうが内容的にもふさわしい。4 行目では、動詞 στείβω「踏む」と κέλευθα「道」の組み合わせの方が、στείβω と κάρηνα「頂」との組み合わせより用例が多い。また 7 行目はパン神の支配領域を描いているのであるが、パンは自然に関わることが多く、この神の領域としては κέλευθα より κάρηναの方が適切である。また 7 行目後半は、πετρήεντα κέλευθα「岩だらけの道」より、πετρήεντα κάρηνα「岩だらけの頂」の方が、6 行目の λόφον υψόεντα「雪が積もった頂」や 7 行目の κορυφὰς ὀρέων「山々の頂」と同格で並べられてより落ち着きが良い。

こうした理由から以下の形を支持する。

4 αἶ τε κατ' αἰγίλιπος πέτρης στείβουσι κέλευθα
7 καὶ κορυφὰς ὀρέων καὶ πετρήεντα κάρηνα.

- 1 デカルトの *vel a sensibus vel per sensus accipi* について
- 2 アリストテレス 1069a 32–33 の関係文について

大塚英樹

1 デカルトの *vel a sensibus vel per sensus accipi* について

「省察」冒頭にある *vel a sensibus vel per sensus accipi* の正しい意味を未だ考えている。ヒントになる箇所がいくつか見つかったので、報告する。今のところ Galenus がこの表現の出所であろうと考えている。最終的結論はまだ出ていないが。

2 アリストテレス 1069a 32–33 の関係文について

16 号の西岡氏の論文を読んで驚いた。32 行の属格の関係代名詞が「その要素」と *elementa* にかけてあったからだ。私自身はこれを述語のはたらきをする関係代名詞とばかり思っていた。驚きは他者の見解を知ってさらに大きくなった。私の見たすべての哲学者が西岡氏と同じ解釈をしている。しかしもしそうなら、*substantia sensibilis sempiterna* の具体例がテキストでは示されないことになる。だがこれは妙な話だ。誰もが同意し、自明のものであるはずの *substantia sensibilis corruptibilis* にわざわざ *veluti plantae et animalia* と具体例が示されるのに対し、意見がわかれているはずの *sempiterna* のほうには何もついていない。考えれば考えるほど哲学者のほうの間違っているのではないかと思えてきた。デカルトの言うとおりの困難な問題では多数決をとってもしかたがない。あえて勇気をもって自説を述べたいと思う。

イーオーの旅路予言の叙述構成:『縛られたプロメテウス』700–741, 786–818

佐野好則

『縛られたプロメテウス』700–741 行と 786–818 行の科白においてプロメテウスはイーオーがこれからたどるべきエジプトへの旅路を予言する。この予言には、カリュベス人やアマゾン族、さらにゴルゴーンたちやアリマスポイ人が他の文献とは異なる位置に住むとされていること、ヒュブリステース川という名称が他の文献に見当たらずどの川を指すか同定困難であること、コーカサス山脈が実際にある黒海の東側ではなくその北側にあるとされていることなど地理的な問題点が多い。本発表では、2 部に別れたこの予言叙述の構成上の特徴に注目することにより、これらの難点を考察する際の新たな観点が与えられることを提案したい。

「20世紀ドイツの人文主義者とナチズム——

その抵抗・傍観・協力の類型をめぐる考察」

曾田長人

ドイツの人文主義者は「古代は人間性の古典的な原像」(1933年)たることを指導原理に掲げる一方、ナチズムに対して傍観から協調を経て抵抗に至るまで、様々な態度を取った。本発表は、ナチズムへの傍観、協調、抵抗を代表する人文主義者として、それぞれヴェルナー・イエーガー(Werner Jaeger 1888–1961年)、リヒャルト・ハルダー(Richard Harder 1896–1957年)、クルト・フォン・フリッツ(Kurt von Fritz 1900–1985年)を考察の対象とし、彼らの研究をドイツの思想史に位置付けることを試みる。

ドイツにおいては18世紀末期の新人文主義以来、人間性を師表とした古典期の古代ギリシアを規範として仰ぎ、歴史学的—実証的方法によってその認識を目指す古典語教育・古典研究が主として行われた。ところが歴史学的—実証的方法に基づく古典研究の結果、古代ギリシアの古典性は相対化され、古典語教育・古典研究は様々な方面からの批判に曝された。その結果、人文主義的な古典語教育・古典研究は19世紀末期以来、古典語の授業時間数を中等学校で削減されるなど周縁化の危機に瀕していた。

1920年代のドイツにおいて、イエーガーを中心とした「第三の人文主義」という古典復興の精神運動が始まる。この運動は新人文主義の乗り越えを目指し、(古典性の相対化をもたらした)歴史学的—実証的な研究から距離を置き、新たな古典性として「パイデア」に注目し、イエーガーの主著『パイデア』がこれを描いた。彼は新人文主義における「美的で個人的な人間の形成」に代わって「政治的な人間の形成」を謳い、同時代のドイツにおいて多くの人文主義者の賛同を得ていた。

イエーガーは1933年ナチ党の政権獲得に伴い、当初ナチズムへ協調の姿勢を示した。しかしナチズムのイデオログに協調の試みを批判され傍観的な姿勢へ転じてゆく。ここでイエーガーとナチズムの古代ギリシア観に内在していた類似と相違に注目する必要がある。両者は本質主義的な思考という似た思想の構えを備え、前古典期の古代ギリシア(特にスパルタ)を共に評価していた。しかしイエーガーは前古典期が古典期へ統合される古代ギリシア観を抱いたのに対して、ナチズムは前古典期の古代ギリシアを絶対視した。1936年イエーガーはアメリカのシカゴ大学へ赴任し、第二次世界大戦後、プラトン主義とキリスト教神学との(「観想的な生」を共通点とした)連続性の証明へ、研究の重点を移した。

ハルダーはイエーガーの弟子であり、キケロやプラトンに関する研究を主に行った。ハルダーはイエーガーが渡米した後ドイツの古典語教育・古典研究の維持に尽力し、ナチ政権下「インドゲルマン精神史研究所」の中心人物として活動した。同研究所は人種理論の基礎付けを目指し、支配人種たるインドゲルマン人の過去の征服を鏡に、第三

国の侵略の正当化を図った。第二次世界大戦後ハルダーはナチズムとの協調を深く悔いたが、同大戦後の彼の一部の研究には過去の人種理論との連続が認められる。

フリッツは「第三の人文主義」の圏外に位置し、歴史学的—実証的方法に基づく研究に依拠した。彼は1934年ナチ政権がドイツの大学教員へヒトラーへの忠誠宣誓を義務付けた時、それを「真理の教授が妨げられない限りで」果たそうとし、ロストック大学から罷免された。フリッツによる忠誠宣誓の拒否をめぐる弁明から、彼が真理の探究を（人種理論など）ナチズムのドグマと対立的に捉えていたことが窺われる。第二次世界大戦後フリッツは啓蒙主義に近い人文主義に依拠し、研究を続けた。

新人文主義における人間性の理想は、キリスト教（の霊性）と啓蒙主義（の理性）の総合から成り立った。第二次世界大戦後この二つの要素から、イエーガーは前者、フリッツは後者の系譜を継承した。ナチズムの経験は、この総合の両要素が分解するのを、否定的に媒介したと考えられる。

シーリウス・イタリクス『プーニカ』15.1, 17.1の提示

高橋宏幸

『プーニカ』最終第17歌は、「異国の敵をアウソニアの地から退去させるために、(Hostis ut Ausoniis decederet aduena terris,)」(Sil. 17.1)という詩行で始まる。歌の最初の行にその歌の叙述の中心を占める人物が言及されることについては、『アエネーイス』第4歌での「女王(regina)」、第12歌での「トゥルヌス」がよく知られ、『プーニカ』でも第7歌に「ファビウス」の例がある。17.1の場合、「異国の敵(hostis aduena)」がハンニバルを指すことは自明であり、トゥルヌスとのパラレルもほぼ明らかであろう。実際、ハンニバルはトゥルヌスと同じように女神ユーノーの怒りを体現してローマに戦争をもたらすことが作品冒頭に提示されるので、第17歌がその結末を語ることで17.1に提示されていると考えられる。しかし、結末では、トゥルヌスとハンニバルの違いが明確になる。トゥルヌスは結局、ユーノーに見捨てられ、アエネーアースに討ち取られる。そして、彼が率いたルトゥリー人は戦争が終わったあとトロイア人と融和する。対して、ユーノーが去って決戦に敗れても、ハンニバルは生き長らえる。また、トゥルヌスが死んでも、女神ユーノーのトロイア人＝ローマ人への憎しみは消えず、ゆえに、ハンニバルがそれを体現することになり、そこに『プーニカ』の出発点があるのに対して、ハンニバルの場合、彼のあとを引き継ぐ存在は見られない。こうした相違に留意したとき、17.1での「異国の(aduena)」がトゥルヌスよりアエネーアースにふさわしい語である(Aen. 4.591, 12.261「よそ者」という侮蔑的含意)ことが注目される。その響きをシーリウスがここに込めたとすれば、ハンニバルにはトゥルヌスと同時にアエネーアースのイメージも与えられていることになり、「よそ者」アエネーアースがディードーのもと

を去ることでローマとカルターゴとの敵対の淵源をなしたと同時に、イタリアへ到着することでトゥルヌスにとって「異国の敵」となったのに対し、「異国の敵」ハンニバルがイタリアを去ることがいま敵対に終止符を打つという対比的な構図を読み取れるかもしれない。

加えて、17.1 は golden line を構成している。Golden line にどれほどの意味があるか見きわめることは難しいが、シーリウスが歌の最初の行に golden line を用いたのは、17.1 以外では 15.1 「だが、ロームルスの国の元老院は新たな懸念に悩まされていた(*At noua Romuleum carpebat cura senatum*)」のみである。ところが、この詩行は『アエネーイス』第 4 歌の最初の 2 行「しかし女王は、すでに前から心に重い恋の傷を負っていた。／脈打つ血で傷を養い、目に見えぬ炎に苛まれている。(At regina graui iam dudum saucia cura/ uulnus alit uenis et caeco carpitur igni.)」を想起させる。『アエネーイス』第 4 歌では、ディードーの心を苛む恋(*cura*)が傷の重さそのままに、結局、その破綻によって彼女を破滅へ導き、自害の際の呪詛がローマへの憎しみをハンニバルに引き継いだ。対して、『プーニカ』第 15 歌では、スキューピオー兄弟を失ったヒスパーニア戦線を誰に任せるかという元老院の懸念(*cura*)から始まりながら、この任務を大スキューピオーが引き受けてカルターゴ・ノウアを攻略し、バエクラの戦いに勝利したのにとどまらず、タレントゥム攻略などまで果たされたことが語られ、懸念は解消されただけでなく、大きな喜びへ転換を見せる。ここでも『アエネーイス』と対比的な提示が読み取れるように思われる。